

敵対と共生： カルデロン『死してなお愛す』におけるモリスコ問題

三 倉 康 博

(受付 2018年10月29日)

1. は じ め に

1492年にイベリア半島最後のイスラーム国家であるナスル朝グラナダ王国の都グラナダが陥落し、8世紀初頭いらい数世紀にわたり続いてきたキリスト教徒によるムスリムに対する国土回復運動すなわちレコンキスタが終了したが、その後も、スペイン国内には多くのムスリムが宗教的マイノリティとして残留していた。キリスト教による宗教的国家統一をめざすスペインは、16世紀初頭に、彼らにキリスト教への改宗と国外退去の二者択一を迫り、前者を選択した人々はモリスコ (moriscos) と呼ばれるようになったが、内面ではなおイスラーム信仰を保持する人々が多く、またスペインと対峙するオスマン帝国や北アフリカ私掠船団との内通も疑われ、彼らをキリスト教スペイン社会に統合することに政府は困難を感じていた。

モリスコの独自の言語、文化、生活習慣を厳しく禁圧する、国王フェリペ2世 (在位1556-1598) による1567年の勅令が引き金となって、1568年にグラナダ地方のアルプハラ山地を中心にモリスコの大規模な反乱が勃発し、1571年まで続いた。これはスペイン史上でも稀にみる凄惨な内戦となり、鎮圧軍——途中から王の異母弟ドン・ファン・デ・アウストリア (don Juan de Austria) が指揮した——・反乱軍双方によって多くの残虐行為が行われた。反乱中から終結後にかけて、グラナダ地方のモリスコはスペイン国内各地に分散追放されたが、その後もモリスコ問題は解決に至らず、1609-1614年にスペインのほとんどのモリスコが国外追放されるに至った¹。

この反乱は、それを目撃した同時代人たちによる数多くの記録——とりわけ重要なものとして、しばしばモリスコ反乱に関する3大史書として扱われる、歴史家ルイス・デル・マルモル・カルバハル (Luis del Mármol Carvajal, 1524-1600) の『グラナダ王国のモリスコたちの反乱と処罰の歴史』 (*Historia del rebelión y castigo de los moriscos del Reino de Granada*,

1 こうしたモリスコ問題に関する古典的概説書として、Antonio Domínguez Ortiz & Bernard Vincent, *Historia de los moriscos. Vida y tragedia de una minoría*, Madrid: Revista de Occidente, 2ª ed., 1979 (1ª ed., 1978) を挙げることができる。

1600)²、小説家ヒネス・ベレス・デ・イータ (Ginés Pérez de Hita, 1544–1619) の『グラナダ内乱』 (*Guerras civiles de Granada*) 第 2 部 (1619)³、詩人・外交官ディエゴ・ウルタド・デ・メンドサ (Diego Hurtado de Mendoza, 1503/04–1575) の『グラナダ戦争』 (*Guerra de Granada*, 1627)⁴が挙げられる——を生んだ。

反乱を直接目撃した世代には属さないが、スペイン黄金世紀文学を代表する劇作家の一人であるペドロ・カルデロン・デ・ラ・バルカ (Pedro Calderón de la Barca, 1600–1681) は、この反乱を描いたコメディア (3 幕の戯曲) 『死してなお愛す』 (*Amar después de la muerte*)⁵ を執筆し、彼の傑作史劇の一つに数えられている。

本稿では、モリスコと旧キリスト教徒 (ムスリムやユダヤ教徒を祖先に持たないキリスト教徒) という二つの集団の複雑かつ流動的な関係をこの戯曲のなかでカルデロンがどう描いているかに焦点を当て、とくに従来の研究では必ずしも注目されてこなかった、後者に属する人物たちの描写も詳細に検証しつつ⁶、この戯曲を分析したい。

2. 『死してなお愛す』の梗概、源泉、執筆時期

ペドロ・カルデロン・デ・ラ・バルカはスペイン黄金世紀演劇においてロペ・デ・ベガ・カルピオ (Lope de Vega Carpio, 1562–1635) と双璧をなす存在であり、多くの名高いコメディアを執筆したが、そのなかでも、17世紀前半に執筆したとみられる『死してなお愛す』 (1677年出版の戯曲集に収録されたのが初版となる)⁷は、モリスコ反乱というスペイン史を揺

2 本稿執筆にあたっては、Luis del Mármol Carvajal, *Historia del rebelión y castigo de los moriscos del reino de Granada*, ed. Javier Castillo Fernández, Granada: Universidad de Granada, 2015を参照した。

3 本稿執筆にあたっては、Ginés Pérez de Hita, *La guerra de los moriscos (Segunda parte de las Guerras Civiles de Granada)*, ed. Paula Blanchard-Demouge, ed. facsimil, Granada: Universidad de Granada, 1998 (1ª ed., Madrid: Imprenta de E. Bailly-Bailliére, 1915) を参照した。なお、『グラナダ内乱』第 2 部は、歴史書というよりもむしろ歴史小説に分類されることもある。

4 この史書は作者の没後に初版が出版されているが、写本が生前から流布していた。本稿執筆にあたっては、Diego Hurtado de Mendoza, *Guerra de Granada*, ed. Bernardo Blanco-González, Madrid: Castalia, 1970を参照した。

5 参照・引用にあたっては、Pedro Calderón de la Barca, *Amar después de la muerte*, ed. Erik Coenen, Madrid: Cátedra, 2008を用いた。引用箇所を示すさいは、本稿筆者による日本語訳の直後に (行数) で該当箇所を示す。[] は本稿筆者による補足を示す。なお、この戯曲は『アルプハラのエル・トゥサニー』 (*El Tuzaní de la Alpujarra*) というタイトルで呼ばれることもある。

6 この戯曲の旧キリスト教徒人物を分析した数少ない研究として、Manuel Delgado Morales, “Amar después de la muerte” y la ‘imprudencia’ del castigo de los moriscos de Granada”, in Serafín González & Lillian von der Walde (eds.), *Palabra crítica. Estudios en homenaje a José Amezcuea*, México D.F.: Universidad Autónoma Metropolitana / FCE, 1997, pp. 169–180が挙げられる。具体的な内容については、本稿の注12, 16, 22を参照。

7 この戯曲の執筆時期については、従来1633年説が唱えられてきたが、エリック・コーエネンはその類似タイトルを持つ作品の作者を取り違えた誤謬に基づくことを指摘し、確実なのは1659年以前 ↗

るがした重大事件を背景に愛と名誉の物語を活写し、異彩を放っている。

この戯曲の梗概を紹介しよう。先述のフェリペ2世の勅令をめぐりグラナダの市参事会で議論がおこなわれたとき、旧キリスト教徒の有力貴族ドン・ファン・デ・メンドサ (don Juan de Mendoza)⁸が、ムスリム王家の血を引くモリスコ貴族ドン・ファン・マレク (don Juan Malec)⁹に暴力をふるい、侮辱する。この件と、メンドサがその後もモリスコ貴族らに対しておこなった侮辱を民族全体への侮辱とみなしたモリスコたちは、ドン・フェルナンド・デ・バロル (don Fernando de Valor) を王に戴いて——以後、彼はアベン・ウメヤ (Aben Humeya) と名乗る——反乱に立ち上がる。戦いのなか、反乱の指導者の一人ドン・アルバロ・トゥサニー (don Álvaro Tuzaní) は、キリスト教徒の兵士ガルセス (Garcés) に妻ドニャ・クララ (doña Clara)——ドン・ファン・マレクの娘で、反乱中はマレカ (Maleca) と改名する——を殺される。その復讐のためにドン・アルバロ——反乱中はエル・トゥサニー (El Tuzaní) と名乗る——は王弟ドン・ファン・デ・アウストリア率いる鎮圧軍の陣営に潜入し、妻を殺めた下手人ガルセスを探し出して殺し、最終的には、モリスコの降伏と赦免のなかで、彼も復讐の正当性を認められ許される。

この戯曲のメインストーリーは、ヒネス・ペレス・デ・イータの『グラナダ内乱』第2部の1エピソード (思いを寄せる女性をキリスト教徒の兵士に殺されたモリスコ青年が復讐を果たす)¹⁰に着想を得、それを文学的に加工したものである。

背景となるモリスコ反乱に関しては、この戯曲において史実からかなりの単純化がみられる (3幕の戯曲に長期にわたるモリスコ反乱を凝縮しようとすれば、複雑きわまりない史実

の作品ということであり、文体的特徴からみておそらく1650年代に入る前に執筆されたと推測できると述べている (Erik Coenen, “Introducción”, in Pedro Calderón de la Barca, *Amar después de la muerte*, ed. Erik Coenen, Madrid; Cátedra, 2008, pp. 47–48)。

- 8 メンドサ家は、1492年のグラナダ征服から反乱勃発時まで、グラナダの軍司令官職を世襲し、モリスコの保護者的役割も果たす名家であった。とりわけ反乱勃発時の軍司令官モンデハル侯がモリスコに寛容な姿勢を示し続け、彼らの帰順を促し徹底討伐を避けようと尽力したことは、マルモル・カルバハルが詳しく記述している (Mármol Carvajal, *op.cit.*, pp. 196, 347, 354, 372, 382–386, 417–419など)。ドン・ファン・デ・メンドサはこの軍司令官の縁者という設定である。反乱を記述した史書には、ドン・ファン・デ・メンドサという名の軍人が実際に登場する (Mármol Carvajal, *op.cit.*, pp. 320, 395–397, 399, 410, 423–425, 495, 498, 502, 553, 563, 565–566, 598, 634, 638, 649–650, 661など; Pérez de Hita, *op.cit.*, pp. 120, 154, 187–189, 192, 199, 230など; Hurtado de Mendoza, *op.cit.*, pp. 168, 189, 216–217, 224, 256, 267, 281, 304, 328, 331, 333, 362など) が、その人間性についての記述は皆無で、歴史上の重要性は低く、カルデロンがどこまでモデルにしたかは不明である。
- 9 ヘロニモ・エル・マレー (Jerónimo el Maleh) という、反乱で重要な役割を果たした実在の有力モリスコ (Mármol Carvajal, *op.cit.*, pp. 334, 426–427, 455, 469–471, 483, 485, 527, 541–543, 546, 550, 555–556, 564, 584, 594, 608, 664, 668 など; Hurtado de Mendoza, *op.cit.*, pp. 314, 317–318 など; Pérez de Hita, *op.cit.*, pp. 17, 51–58, 117, 139, 155–165, 169–170, 179, 197, 211, 213, 263, 290, 292, 294–295, 297, 307–308, 319, 329, 334, 336, 351などに登場する) をモデルにしていると考えられる。
- 10 Pérez de Hita, *op.cit.*, pp. 292–298, 324–328, 330–339. このエピソードでは、殺されるモリスコ女性はヘロニモ・エル・マレーの姉妹となっている。

を取捨選択、操作するのは当然のことだったが)。戯曲では、反乱当初に重要な役割を果たしたモンデハル侯 (el marqués de Mondéjar) は他人物によって言及されるだけで、台詞を持った舞台の人物としては登場せず、また史実とは異なり、反乱勃発当初からドン・ファン・デ・アウストリアが政府軍を率いたという設定になっている。描かれる戦闘は反乱軍側の要衝ガレラ (Galera) の攻防戦だけで、ガレラ陥落後に反乱軍は徹底抗戦を主張する指導者アベン・ウメヤを殺害して降伏する¹¹。

だが、これから見ていくように、そのような単純化にもかかわらず、政府側陣営の旧キリスト教徒人物たちと、反乱を起こしたモリスコたちの関係は複雑である。

3. 先行研究と新たな視点

この戯曲は近年注目を浴び、多くの研究文献が現れている。モリスコ反乱に関する史実やヒネス・ペレス・デ・イータの文学的源泉をカルデロンがどのように取り入れ加工したかに焦点を当てたり、この戯曲における「名誉」(honor) の問題に焦点を当てたりと、切り口は様々だが、どのような切り口にせよ、最終的には作中に描かれたモリスコのイメージの分析に行きつく研究が多い。そして、細かい議論については多種多様であるが、この戯曲が「モリスコたちを威厳をもった人間として描いている」ことは、先行研究はほぼ一致して認めている¹²。

11 史実では、アベン・ウメヤは反乱途中で反乱軍内部の内紛で殺害され、アベン・アボー (Aben Aboo) という別の指導者が反乱軍の指揮を継続した。

12 史実や文学的源泉の利用のあり方から分析を進めた研究としては、Ángel Valbuena Briones, “La guerra civil de Granada a través del arte de Calderón”, in A. David Kossoff & José Amor y Vázquez, *Homenaje a William L. Fichter. Estudios sobre el teatro antiguo hispánico y otros ensayos*, Madrid: Castalia, 1971, pp. 735–744は、ペレス・デ・イータの『グラナダ内乱』第2部とマルモル・カルバハルの『グラナダ王国のモリスコたちの反乱と処罰の歴史』をこの戯曲の主要な源泉と位置づけて、カルデロンがそれらをどのように利用・加工したかを分析している。そして、カルデロンが史実を柔軟に操作して戯曲を構築しており、イスラームを信じ続けた点にモリスコの過ちがあるとみなすものの、モリスコ差別・抑圧に反対して彼らの運命的悲劇に同情するのがこの作品の精神であると論じている。Margaret Wilson, “Si África llora, España no ríe: A Study of Calderón's *Amar después de la muerte* in Relation to its Source”, *Bulletin of Hispanic Studies*, 61 (1984), pp. 419–425は、この戯曲がモリスコ反乱の史実やペレス・デ・イータの『グラナダ内乱』第二部をどのように利用・改変しているかという視点からこの作品の精神を分析しており、この作品がモリスコの個人的・集団的悲劇とキリスト教徒人物たちの自責感情やモリスコへの同情を描くことで、スペインの姿勢を問い直し、敗者であるモリスコたちのモラル的勝利を明らかにしていると論じている。Melchora Romanos, “Ficción y realidad histórica en «El Tuzaní de la Alpujarra o Amar después de la muerte» de Pedro Calderón de la Barca”, in Kurt & Theo Reichenberger (eds.), *Calderón: protagonista eminente del barroco europeo*, 2 vols., Kassel: Reichenberger, 2000 (Teatro del Siglo de Oro. Estudios de literatura, 60–61), I, pp. 355–372は、ヒネス・ペレス・デ・イータの『グラナダ内乱』第2部をカルデロンがどのように文学的に加工したかに焦点を当てつつ『死してなお愛す』を分析しており、カルデロンが同時代の劇ジャンルの要請を意識しつつ、個人的コンテキストと集団的コンテキストを結び

付け、名譽と愛をテーマとする戯曲を構築したと分析している。Jorge Checa, “Calderón de la Barca y las catástrofes de la historia: *Amar después de la muerte*”, *Nueva Revista de Filología Hispánica*, 51 (2003), pp. 147–192は、歴史的背景および文学的源泉（ペレス・デ・イータの『グラナダ内乱』第2部と、レコンキスタ時代を背景に高貴なモーロ人を描いた作者不詳の小説『アベンセラへ』(*Abencerraje*)) とこの戯曲を照らし合わせつつ、ドン・アルバロ・トゥサニーとドン・ファン・デ・アウストリアの対比という観点からこの戯曲を分析し、カルデロンがモリスコとスペインの和解に関して悲観的だったと論じている。Raphaël Carrasco, “Contra la guerra: Calderón y los moriscos de las Alpujarras”, in Felipe B. Pedraza Jiménez, Rafael González Cañal & Elena E. Marcello (eds.), *Guerra y paz en la comedia española. Actas de las XXIX Jornadas de teatro clásico de Almagro. Almagro, 4, 5 y 6 de julio de 2006*, Cuenca: Universidad de Castilla-La Mancha, 2007, pp. 127–155は、歴史背景や、モーロ人を好意的に描く文学潮流と『死してなお愛す』の関係を検証しつつ、この戯曲がモリスコ反乱を通して「血の純潔」と戦争という同時代のスペイン社会の価値体系を批判していると論じている。Erik Coenen, “Las fuentes de *Amar después de la muerte*”, *Revista de Literatura*, 69 (2007), pp. 467–485は、モリスコ反乱に関する3大史書をカルデロンがどう利用したかを分析し、ペレス・デ・イータの『グラナダ内乱』第2部に加え、マルモル・カルバハルの史書も戯曲の細部において利用していることを明らかにする一方、ウルタド・デ・メンドサの史書はほとんど利用していないと主張している。そしてカルデロンがこれら史書を利用しつつ、ドン・アルバロとドニャ・クララに観客のシンパシーを呼ぶ劇的効果を持った作品を目指したと主張している。

「名譽」の観点を切り口とした研究としては、Thomas E. Case, “Consideraciones sobre *Amar después de la muerte*, de Calderón de la Barca”, *Segismundo: Revista Hispánica de Teatro*, 37–38 (1983), pp. 37–48; “Honor, Justice, and Historical Circumstance in *Amar después de la muerte*”, *Bulletin of the Comediantes*, 36 (1984), pp. 55–69は、ドン・アルバロ・トゥサニーの高潔さと英雄性を指摘するとともに、この戯曲がモリスコに対してなされた不正義を示し、モリスコが旧キリスト教徒と同様の名譽を持つことを主張していると論じている。Anne J. Cruz, “Making War, Not Love: The Contest of Cultural Difference and the Honor Code in Calderón’s *Amar después de la muerte*”, *Caliope*, 6 (2002), pp. 17–33; “«Corazón alarbe»: Los moriscos, el código de honor y la crítica de la guerra en *Amar después de la muerte*”, in Ignacio Arellano (ed.), *Calderón 2000. Homenaje a Kurt Reichenberger en su 80 cumpleaños (Actas del Congreso Internacional, IV Centenario del nacimiento de Calderón, Universidad de Navarra, septiembre, 2000)*, 2 vols., Kassel: Reichenberger, 2002 (Teatro del Siglo de Oro. Estudios de literatura, 75–76), II, pp. 121–132は、この作品がモリスコへの抑圧を批判していること、家族の名譽への忠誠と愛における忠実さというキリスト教的価値観をモリスコの恋人たちが体現していることを指摘するとともに、モリスコも旧キリスト教徒も名譽感情に過度に拘束されるがゆえに非合理的行動へ走っていると論じている。

その他、この戯曲における、モリスコ表象に焦点を当てた研究としては、José Miguel Caso González, “Calderón y los moriscos de las Alpujarras”, in Luciano García Lorenzo (ed.), *Calderón. Actas del «Congreso Internacional sobre Calderón y el teatro español del Siglo de Oro» (Madrid, 8–13 de junio de 1981)*, 3 vols., Madrid: CSIC, 1983, I, pp. 393–402は、この戯曲が対モリスコ政策と人種主義的社会を批判し、モリスコたちの騎士道的・血統的威厳を擁護していると論じている。Delgado Morales, *op.cit.* は、ドン・ファン・デ・メンドサとガルセスという二人の旧キリスト教徒人物に焦点を当ててこの戯曲を分析しており、カルデロンが旧キリスト教徒によるモリスコ抑圧と、反乱鎮圧時の政府軍の非人道的行為を批判し、抑圧に対し立ち上がったモリスコたちの反乱の大義を認めていたと論じている。Diane E. Sieber, “El monstruo en su laberinto: cristianos en las Alpujarras de *Amar después de la muerte*”, in Florencio Sevilla Arroyo & Carlos Alvar Ezquerro (eds.), *Actas del XIII Congreso de la Asociación Internacional de Hispanistas, Madrid 6–11 de julio de 1998*, 4 vols., Madrid: Castalia, 1998, I, pp. 740–746は、この戯曲において反乱の舞台となるアルプハラ山地が「迷宮」のイメージを付与されており、そこに立てこもるモリスコたちは怪物ミノタウロス、討伐するキリスト教徒たちは英雄テセウスのイメージを当初投影されているが、その後ドン・アルバロ・トゥサニーがテセウス、キリスト教徒兵士ガルセスがミノタウロスになるというイメージの逆転が生じていると論じている。Manuel Ruiz Lagos, “«El Tuzaní de la Alpujarra» o la singularidad de la memoria histórica”, in Pedro Calderón de la Barca, *El Tuzaní de la Alpujarra*, ed. Manuel Luis Lagos, Alcalá de

Guadaira (Sevilla): Guadalmena, 1998, pp. 17-80は、スペイン王の臣民であることを受け入れなかったモリスコ自身に彼らの悲劇の原因があるとしながらも、反乱をスペイン王の臣民どうしの内戦と位置づけ、モリスコの赦免と文化的統合という理想的結末を提示するのがこの戯曲の精神であると解釈している。Hannaá Walzer, “Los moriscos de *Amar después de la muerte*”, in José María Ruano de la Haza & Jesús Pérez Magallón (eds.), *Ayer y hoy de Calderón. Actas seleccionadas del Congreso Internacional celebrado en Ottawa del 4 al 8 de octubre del 2000*, Madrid: Castalia, 2002, pp. 133-145は、この戯曲がキリスト教以外の信仰を否定しモリスコのキリスト教化を理想とする一方で、モリスコとキリスト教徒の差異よりも類似性を強調し、モリスコに対する差別を批判し、彼らの反乱の動機に理解を示していると論じている。Giuseppe Grilli, “La otredad de *Amar después de la muerte*”, in Ignacio Arellano (ed.), *Calderón 2000. Homenaje a Kurt Reichenberger en su 80 cumpleaños. Actas del Congreso Internacional, IV Centenario del nacimiento de Calderón, Universidad de Navarra, septiembre, 2000*, 2 vols., Kassel: Reichenberger, 2002 (Teatro del Siglo de Oro. Estudios de literatura, 75-76), II, pp. 207-218は、この戯曲が古典悲劇のジャンルの要請にそって構築されていると主張し、その観点から個人と集団の相克、ドン・アルバロ・トゥサニーらモリスコ貴族たちの模範性と英雄性について論じている。Silvia Arroyo Malagón, “La representación del espacio como monstruo en algunas obras del Siglo de Oro. El morisco en *Amar después de la muerte*: dialéctica y monstruosidad de espacios”, in Pedro Guerrero Ruiz, José Luis Molina, Santos Campoy & María Teresa Caro (eds.), *Lorca. Taller del tiempo. ALDEEU 2004, Asociación de Licenciados y Doctores Españoles en Estados Unidos*, Murcia: Universidad de Murcia, 2005, pp. 393-400は、この戯曲におけるモリスコ表象と空間の関連を通過儀礼に関する理論枠組みを用いて分析し、キリスト教社会から疎外されたモリスコたちが反乱と新国家建設により本来のアイデンティティを回復したかにみえるが、キリスト教社会からの影響も同時に明らかとなり、新国家は自律性を保てず崩壊していくと論じている。Coenen, “Introducción”, pp. 9-75 (特に pp. 18-40) は、この戯曲の主要モリスコ人物たちは貴族で旧キリスト教徒貴族との共通性が大きく、ドン・アルバロ・トゥサニーはキリスト教徒の行動の模範として描かれていること、カルデロンの他作品と共通する戦争批判がこの作品にみられることを論じている。Juan Carlos Bayo, “Problemas contextuales en torno a *Amar después de la muerte* o *El Tuzaní del Alpujarra*”, in Manfred Tietz & Gero Arnscheidt (eds.), *Calderón y el pensamiento ideológico y cultural de su época. XIV Coloquio Anglogermano sobre Calderón. Heidelberg, 24-28 de julio de 2005*, Stuttgart: Franz Steiner Verlag, 2008, pp. 71-93は、この戯曲の出版史を『サラメアの村長』との比較も取り入れながら丹念に検証しつつ、レバントの海戦に関するクロノロジー操作が、モリスコがオスマン帝国の「第五列」であるという言葉説を排し、モリスコ問題を純粋にスペイン内部の問題と位置付けていること、この戯曲がモリスコ追放を意識しつつモリスコに好意を示していると主張している。

その他の興味深い視角からの研究としては、José Alcalá-Zamora, “Individuo e historia en la estructura teatral de «El Tuzaní de la Alpujarra»”, in Luciano García Lorenzo (ed.), *Calderón. Actas del «Congreso Internacional sobre Calderón y el teatro español del Siglo de Oro» (Madrid, 8-13 de junio de 1981)*, 3 vols., Madrid: CSIC, 1983, I, pp. 343-363は、この戯曲を、歴史と個人の衝突、そして権力の逸脱を描く社会批判・政治批判の劇ととらえ、カルデロンの同種の他作品と関連付けている。Grace Magnier, “Representación del morisco héroe en dos comedias del Siglo de Oro”: *El Tuzaní de la Alpujarra y El valiente Campuzano*”, in Jean Pierre Molénat et al., *Actas. Simposio Internacional de Mudejarismo. Mudéjares y moriscos. Cambios sociales y culturales. Teruel, 12-14 de septiembre de 2002*, Teruel: Centro de Estudios Mudéjares / Instituto de Estudios Turolenses, 2004, pp. 527-535は、『死してなお愛す』とやはりモリスコ主人公の悲劇を描いたフェルナンド・デ・サラテ (Fernando de Zárate) の『勇敢なカンブサノ』を比較しており、『死してなお愛す』においてカルデロンがモリスコへの差別を批判し、洗礼を受けた全キリスト教徒の平等と他者への寛容を説いていると論じている。Benedetta Belloni, “Moriscos en clandestinidad: la aplicación literaria de la *taqiyya* islámica en la obra *Amar después de la muerte* de Pedro Calderón de la Barca, *Espéculo. Revista de Estudios Literarios*, 47 (2011) (<http://www.ucm.es/info/especulo/numero47/moriscal.html>) は、生命や財産の危機にさらされたムスリムに信仰を隠すことを認めるタキヤ (taqiyya) の教義がこの戯曲でどう描かれているかを分析し、さらに外見と真実というバロック的テーマとの結びつきを論じている。Juan Carlos Garrot Zambrana, “Efectos cómicos y patéticos en Calderón: *El Tuzaní de la Alpujarra*”, ↗

だが、この作品における旧キリスト教徒人物たちとモリスコ人物たちの関係、それぞれが相手集団をどう認識しているか、相手集団との関係で自集団をどう位置付けているかという観点からは、この戯曲をさらに掘り下げて分析する余地があり、そこからこの戯曲のモリスコ観に迫ることができると思われる。

4. 敵対する2集団：「アフリカの民」と「スペイン人」

4.1. 自らの「アフリカ性」を強調するモリスコたち

この戯曲に登場するモリスコたちは、自分たちのルーツであるアフリカ（現在の北アフリカのこと）を強く意識している。彼ら自身が、戯曲冒頭から、自らの「アフリカ性」を自認・強調し、一般のキリスト教徒スペイン人——「スペイン人」「キリスト教徒」とモリスコたちと呼ばれている——から自集団を区別している。反乱終息直前までそれは一貫する。彼らはイベリア半島外部にルーツを持つ征服者の子孫として自分たちを位置づけ、スペイン再征服、アル・アンダルス（イスラーム支配下のイベリア半島）復興の夢を抱いている。二つの集団の衝突という構図が、一見すると強調されているのである。

戯曲冒頭、カーディー¹³の家でモリスコたちが密かに祝祭をしていたとき、一人が次のような歌を歌う。ここではアフリカにルーツを持ち、一時はスペインの大半を支配したイスラーム・スペインの栄光が追憶の対象となると同時に、レコンキスタ後の現状が嘆きの対象となっている。

アラールの公正な秘儀により、
哀れな囚われの身となった

in Milagros Torres & Ariane Ferry (eds.), *Tragique et comique liés dans le théâtre, de l'Antiquité à nos jours (du texte à la mise en scène)*, Rouen: Publications électroniques du Cérédi, 2013 (<http://ceredi.labos.univ-rouen.fr/public/?efectos-comicos-y-pateticos-en.html>) は、この戯曲に登場するアルクスクス (Alcuzcuz) という道化 (gracioso) 的なモリスコ人物が代表する喜劇的要素を分析し、この人物の果たす役割が祝祭的・周縁的なものとどまっていると論じている。

こうした一連の先行研究においては、この戯曲が主要なモリスコ人物たちに一定の好意を示しているという見解が支配的だが、この点について否定的な（管見の及ぶ限り）唯一の先行研究は Brent W. Devos, "Calderón's Ambiguity with Respect to the Moriscos in *El Tuzaní de la Alpujarra*", *Anuario Calderoniano*, 2 (2009), pp. 111-127で、この戯曲がモリスコに同情的、旧キリスト教徒に批判的であるという見方をとらず、むしろこの戯曲はモリスコへに対するスペイン社会の差別感情を反映していると解釈している。ドン・アルバロとドニャ・クララ以外のモリスコは否定的に描かれており、不平等な地位を受け入れず反乱を起こしたモリスコ自身が悲劇の責任を負うのが作品の精神であるという。

13 カーディーは本来、イスラーム世界における裁判官であり、紛争解決にとどまらず法行政全般を担当した（日本イスラーム協会ほか（監）『新イスラーム事典』平凡社、2002年、176-177頁）。ただしこの戯曲では、モリスコ共同体の有力者という程度の位置づけである。

アフリカの帝国が、
そのみじめで冷酷な運命に涙しても、
[…]
スペインの自由のもとに
スペインを捕囚の身にした
あの栄光の事績の
比類なき記憶よ万歳。(vv. 15-23)

カーディーの家でモリスコたちが密かに祝祭をしていたところにドン・ファン・マレクが不意に現れたとき、カーディーは次のように、マレク家がアフリカにルーツを持つことに言及する。「おおドン・ファンさま、アフリカに発してはいても高貴なマレク家の血によりグラナダ市の市参事会員にまでなることのできたお方、あなたがこんな風に私の家にいらっしゃるとは？」(vv. 54-59)

マレクはグラナダの市参事会に出席してフェリペ2世の勅令(前述)について知り、同胞たちにその報告に来たのだが、勅令を説明するとき、かつては征服者の立場だったイスラーム・スペインの過去と現状に言及する。

さて、条件というのは、繰り返されてきたものもあれば新しいものもあるが、いっそう強い調子で書かれていた。その言い分は、今はスペインを焼いたあの不敗の火の老衰した灰となっているアフリカの民のなんびとも、祭りをしてはならず、歌と踊りもならず、絹の服もならず、入浴もならず、なんびとの家でもアラビア語の会話が聞かれてはならず、カスティリャ語で話さねばならぬのだと言う。(vv. 88-101)

続いてドン・ファン・マレクは市参事会でモリスコの代表としておこなった自分の発言について報告するが、ここでもアフリカという言葉が現れる。「私は、最も歳がいつているため最初に口を開くことになったのだが、こう言った。アフリカ由来の習慣を少しずつ忘れてゆくことは正しい法であり神聖なる予防措置だが、こんなにも急激におこなうのは道理に反すると」(vv. 102-109)。

そして市参事会でドン・ファン・デ・メンドサから受けた侮辱を同胞たちに伝えたマレクは、これは民族全体への侮辱であるとして、反乱を呼びかけるが、ここでもアフリカという言葉がやはり現れる。「おお勇敢なモリスコたちよ、アフリカの高貴な名残よ！キリスト教徒たちはそなたたちを奴隷にすることしか考えておらぬ。アルプハラは[…]すべて我々のもの。物資と武器をかの地へ運び込もうぞ」(vv. 176-189)。

自集団をアフリカと結びつけるモリスコは、ドン・ファン・マレクだけではない。兵士ガ
ルセスに傷つけられ瀕死状態に陥ったドニャ・クララ（前述のように、反乱後はマレカを名
乗っている）も、死の間際に再会した夫ドン・アルバロ・トゥサニーを最初は何者か見分け
られないのだが、同じモリスコだということまでわかると、「アフリカのアラブ人」すなわち
モリスコと「スペイン人」を区別して、次のように言う。

その言葉から、あなたがアフリカのアラブ人であることがよくわかります。女である
こと、悲惨な境遇にあることで私が二重にあなたに義務を課することができるならば、親
切なおこないを一つ引き受けてくださいますか。

ガビア [反乱軍の拠点の一つ] に我が夫、エル・トゥサニーが城代としております。
ただちに彼を探しに出発してください。そして私からのこの最後の固い抱擁を彼に届けて
ください。さらに彼に言ってください、彼の妻が、名誉よりも彼女の宝石とダイヤモンド
に欲を抱いた一人のスペイン人の手にかかって、自らの血に浸かり、今日息絶えて
ガレラに横たわっていると。(vv. 2206-2221)

また妻ドニャ・クララを失ったドン・アルバロは復讐を誓うが、その独白のなかで、「ア
フリカ」という言葉は使わないものの、自身の「アラブ性」を強調している。「アラブの胸、ア
ラブの心に、死してなお愛があるのだ」(vv. 2364-2366)。後述するように、彼はキリスト教
スペイン社会への同化が進んでいるモリスコ人物なのだが、ここでは彼もまた、自分をス
페인人から差異化しているのである。

4.2. 旧キリスト教徒のモリスコ蔑視

一方、旧キリスト教徒人物たちのモリスコに対する感情として、まずモリスコへの差別感
情、モリスコを自分たちより劣る「他者」とみなす感情がみられる。

ドン・ファン・デ・メンドサは、先述のように、市参事会でドン・ファン・マレクを侮辱
して騒動となり、アルハンブラ城に拘束される。そして事態終息のためマレクの娘ドニャ・
クララと自分の結婚がドン・フェルナンド・デ・パロル主導で提案されたときも、再びモ
リスコの血統を侮辱する言辞を吐いて、これを拒否する。「メンドサ家をマレクの血と混ぜる
ことがふさわしいとも思えません。メンドサ家とマレク家ではつり合いが取れませんし、良
い響きにもならない」(vv. 818-822)。「わが一族は、王であったことはありませんが、モ
ーロ人の王たち以上の存在でしたぞ」(vv. 828-830)。こうした彼の一連の暴力的言動がモリス
コたちの決意を固めさせ、反乱を誘発する。

この調停の場面に居合わせたグラナダの旧キリスト教徒の有力者ドン・アロンソ・デ・ス

ニガ (don Alonso de Zúñiga) も、口論のなかで調停の役目を放棄し、ドン・ファン・デ・メンドサの肩を持つ (vv. 834-842)。

反乱勃発後、鎮圧軍の総司令官ドン・ファン・デ・アウストリアのアドバイザーのような役割を担うドン・ファン・デ・メンドサは、反乱軍に関する情報を王弟に伝える場面で、モリスコをアフリカと結びつけるが、そこにはやはり蔑視と警戒の感情がこもっている。ドン・ファン・デ・メンドサは王弟に言う。「これが […] アルプハラです、これがモリスコたちの田舎くさい城壁、野蛮な防備です、彼らはアフリカの山の民として、今日、この山にぶざまに守られて、スペインを取り戻そうとしているのです」 (vv. 931-938)。

そしてアフリカのムスリムたちからの支援をモリスコたちが待っているというメンドサの言葉は、モリスコたちのアフリカ性=他者性をさらに際立たせる。「我々の側では不安が増し、彼らの側では傲慢さが増し、そして皆の害が増してゆきました。というのも、彼らがアフリカからの支援を待っているのは周知のことですし、もし救援が到着すれば、その侵入を防ごうとすれば、我々の力が分散するのはすでに明らかだからです」 (vv. 1055-1062)。

反乱勃発後に鎮圧軍の総司令官として登場する劇中のドン・ファン・デ・アウストリアは、モリスコへの憎悪と侮蔑に満ち、自らの名誉を第一の目的として、反乱軍に対し軍事的勝利を得ようとする¹⁴。

ドン・ファン・デ・アウストリアが登場して最初に発する台詞は、モリスコへの蔑視と憎しみを凝縮している。

反逆せし山よ、 […] 忌まわしい盗賊どもの巢窟よ、今日が、今日こそがお前のうんざりする背信の命絶える日だ。 […]

これは殺しと呼ぶのであって、打ち負かすとは言わぬ。盗人どもの群れを打ちのめすこと、盗賊どもの徒党を屈伏させることは余の名誉にふさわしいまゝではない。それゆえ、我が名声よ、これを勝利ではなく罰と呼ぶよう、時にゆだねるのだ。(vv. 877-900)

だが、レパントの海戦の英雄として戯曲に登場する (史実では1571年のレパントの海戦はモリスコ反乱鎮圧直後の出来事であるから、ここではクロノロジーが操作されている) ドン・

14 ドン・ファン・デ・アウストリアのモリスコ蔑視と名誉意識については、Checa, *op.cit.*, pp. 162-166 でも指摘されている (Valbuena Briones, *op.cit.*, pp. 739-740は、王弟がキリスト教的英雄の模範として描かれていると論じているが、疑問である)。またモリスコ反乱の3大史書においても、ドン・ファン・デ・アウストリアは戦場での名誉に飢えた若者として描かれている (Mármol Carvajal, *op.cit.*, p. 559; Hurtado de Mendoza, *op.cit.*, p. 284; Pérez de Hita, *op.cit.*, pp. 230, 235, 283-284)。カルデロンの戯曲もそうした史書のドン・ファン像を継承しつつ、レパントの海戦に関するクロノロジーを操作することで、王弟の名誉欲を一層強調していると言える。

フアン・デ・アウストリアはその後、敵として蔑視しているモリスコへの勝利に、レバントに引き続く名誉を求めるようになる。ガレラ——原文の Galera は、スペイン語では同音で「ガレー船」(galera) の意味にもなる——という町が反乱軍の拠点の一つと知った王弟は、レバントの海戦とモリスコ反乱に連続性を認め、反乱鎮圧がレバントで得た自分の名声をさらに高めると考えるのである。ガルセスからガレラの弱点を聞きだした王弟は配下の隊長ドン・ロペ・デ・フィゲロア (don Lope de Figueroa)¹⁵に「アルプハラにガレラの町があると聞いてからというもの、余はそれを攻囲したくなった。ガレー船で得た幸運が海上と同様に陸上でも余のもとにあるか知るためにな」(vv. 1789-1795) と述べ、また、ガレラ攻略を決意したあと、「天よ、海上においてと同様に陸上においても私に幸運をお与えください。あの海戦とこの野外攻囲戦を対置して、すぐに、陸海の双方で、私が同時に二つの勝利を得たと言えるように」(vv. 1802-1809) と天に呼びかける。モリスコを蔑視しつつ彼らの反乱をレバントの延長線上に位置づけ、自分の軍事的名誉を追求しようとする王弟は、モリスコ反乱を現実と遊離した一人よがりなコードで解釈し、モリスコ問題の現実に正面から向き合おうとしない(事実、彼が反乱終息のための具体的方策を自ら語る場面はない)。

ガレラ陥落のあと、メンドサたちの助言を受け入れた彼はモリスコ反乱軍に降伏勧告をおこなう決意をするが、それもやはり、自分の名誉欲を満足させるためである。

わが兄陛下はこれを余が鎮圧すべく余を派遣した [···]。しかし武器を用いずにうながすことは、余の怒りにはできぬこと。とは言え、すでに罰と許しを兄君が余にゆだねているのだから、余がいかなるときも、武器とともに許しを、うながしとともに罰を行使することの証人に、この世がなるようにつとめよう。(vv. 2430-2439)

降伏勧告に反乱軍が動揺し内部分裂を始めたとも聞いても、ドン・フアン・デ・アウストリアはあくまでも戦場での勝利と、それによって獲得される名誉を求め、反乱軍の首領アベン・ウメヤが拠点とするベルハ攻略を目指す。「では、今日アルプハラがそのような状態のなら、彼らが互いに殺し合う人の形をした蛇となる前に、全軍ベルハへ進撃せよ、そして彼らが互いに打ち負かし合う前に、我々が彼らを打ち負かすのだ。手柄を彼らのものにしてはならぬ、我々のものにできるのならば」(vv. 2777-2785)。

戦場での容赦ない徹底討伐を希求するメンタリティをより卑俗なレベルで代表するのが兵士ガルセスで¹⁶、反乱軍の要衝ガレラを爆薬で土台から爆破できる箇所を偶然見つけそれを

15 歴史上実在の名高い軍人 (1541/42-1585) で、モリスコ反乱鎮圧でも活躍した。

16 Delgado Morales, *op.cit.*, p. 175; Romanos, *op.cit.*, p. 363も、ガルセスが政府軍の最も醜い面を示している指摘している。

指揮官に進言する彼は、自分がいったん捕らえたものの逃走されたモリスコのアルクスクス (Alcuzcuz) への私怨も重なり、次のように言う。「私は殿下に、ガレラのなかにあるすべての命を […] 捧げます。子供たちに対する哀れみも、老人どもに対する寛容も、女どもに対する礼節も、私の怒り、私の剣の前には無力でありましょう」(vv. 1778-1783)。

ドン・ファン・デ・アウストリアが名誉欲に突き動かされる人物なのに対し、ガルセスは軍人としての名誉を求めると同時に、物欲にも支配されている。政府軍の兵士に変装してドン・ファン・デ・アウストリアの陣営に潜入したドン・アルバロ・トゥサニーに対し、ドニャ・クララ殺害時のことを回想して彼は告白する。「私は、賞賛のなかに利益を求めている、利益と名誉は共存が難しいというのに。欲望に駆られ大胆となり、あらゆる部屋を調べ回った」(vv. 3008-3013)。

ガレラ陥落直後に略奪に走った彼は、ドン・アルバロの妻ドニャ・クララから真珠の数珠など——婚礼の日にドン・アルバロが贈ったもの——を奪おうとし、その際に彼女を刺し殺してしまう。

第二幕から登場する隊長ドン・ロペ・デ・フィゲロアも、ガレラの戦いでドン・ファン・マレクを殺すさい、次のように侮蔑の言葉を吐く。「死ね、犬め、マホメットにわしからの伝言を伝えてやれ」(vv. 2150-2151)。

5. 共生の刻印

5.1. モリスコたちの「スペイン性」

だが、前述のように自らの「アフリカ性」を強調する一方で、モリスコたちには、レコンキスタ完了後に旧キリスト教徒たちと共生した年月の刻印が刻み込まれている。

反乱を同胞たちに呼びかけたドン・ファン・マレクは、もともとキリスト教社会への同化を果たし、貴族として市の要職についている人物で、ドン・ファン・デ・メンドサと市参事会で衝突した日も、その年齢ゆえ会議での最初の発言を認められているし、マレクを侮辱したメンドサは、いったんアルハンブラ城に収監されている。反乱の首領アベン・ウメヤとなるドン・フェルナンド・デ・バロルも、当初はメンドサとマレクの和解を目指し、マレクの娘ドニャ・クララとメンドサの縁談を提唱する。モリスコたちへの抑圧は過酷であったが、そのなかで一定の社会的上昇を果たし、グラナダ市の政界で旧キリスト教徒とともに重要な役割を担ったモリスコ・エリートの実在も戯曲は描いている。

主人公ドン・アルバロ・トゥサニーに注目すれば、復讐のためドン・ファン・デ・アウストリアの陣営にキリスト教徒に変装して潜入したさい、彼が深くキリスト教スペイン社会に同化していることが明らかになる。完璧なスペイン語を話す彼は、正体を疑われることがまっ

たくなく、それが復讐実現を可能にしている¹⁷。実際、ドニャ・クララを殺害した下手人の兵士ガルセスは、ドン・アルバロに刺されるまで、彼がモリスコだとわからない。そしてドン・アルバロは妻の復讐を果たした瞬間、反乱勃発後のエル・トゥサニーという名ではなく、反乱勃発前のキリスト教徒としての名前をガルセスに対して名乗る。「彼女の夫、ドン・アルバロ・トゥサニーが、お前を殺すのだ」(vv. 3098-3099)。

また、ドン・アルバロ・トゥサニーも、彼以外のモリスコ貴族たちも、旧キリスト教徒貴族同様、名誉の問題に執着している¹⁸。名誉は黄金世紀スペイン社会においてきわめて重要な観念であったことは良く知られているが、劇中では、スペイン社会のマイノリティであるモリスコの貴族層にもそれが深く浸透しているありさまが描かれている。作中では、最初に述べたように、メンドサによるドン・ファン・マレクらモリスコ貴族たちへの名誉侵害がモリスコ反乱勃発の直接の原因ともなっている。それだけでなく、反乱が勃発する前のことだが、ドン・アルバロはドニャ・クララと結婚することでその父ドン・ファン・マレクの婿となり、年老いて自分では戦えない舅の代理としてメンドサに復讐する資格を得ようとするし (vv. 306-345)、一方でドニャ・クララは、父が受けた侮辱により自分も名誉が失われたと感じ、恋人ドン・アルバロ・トゥサニーとの結婚が不可能になったと考えるのである。彼女はドン・アルバロに言う。「私のあなたに対する愛は実に大きなものですから、あなたの妻になるわけにはいきません。あなたが名誉なき父を持つ妻を娶ることがないようにしたいのです」(vv. 292-295)。

そして戯曲の結末では、ガレラ陥落後のドン・ファン・デ・アウストリアからの降伏勧告を受けて、モリスコ陣営内で「アフリカ派」と「スペイン派」の内紛が生じ¹⁹、最終的には、「スペイン派」によって首領アベン・ウメヤが殺害され、内心ではキリスト教信仰を保持していたイサベル (Isabel)——ドン・アルバロの姉妹で、メンドサと恋仲だったが、反乱開始後はアベン・ウメヤの妻となりリドラ (Lidora) と名乗っていた——によって全モリスコの投降が実現するのである。

このように、『死してなお愛す』のモリスコ人物たちは、言葉のうえで自分たちとアフリカのつながりを強調する一方で、自分たちのルーツであるアフリカと、生れ故郷であるスペインのあいだで揺れ動いているのである²⁰。

17 この点は先行研究でも指摘されている (Cruz, “«Corazón alarbe»...”, p. 125; “Making War...”, p. 22; Arroyo Malagón, *op. cit.*, p. 398)。

18 この点は先行研究でも指摘されている (Cruz, “«Corazón alarbe»...”, pp. 124, 130; “Making War...”, pp. 30-31; Checa, *op. cit.*, p. 153)。

19 降伏勧告を伝える使者として反乱軍の陣営を訪れたドン・ファン・デ・メンドサの報告によれば、「[...] アルプハラ全体が民衆の党派に分かれ、一方は『スペイン』を呼号し、もう一方は『アフリカ』を呼び叫んでいるのです [...]」(vv. 2762-2765)。

20 Walzer, *op. cit.*, p. 137は、この戯曲に登場するモリスコたちのイスラームへの帰依が不明確であると論じている。

5.2. 旧キリスト教徒人物たちの親モリスコ感情

先行研究では、この戯曲のモリスコ人物たちと比較すると、旧キリスト教徒人物たちは否定的側面（傲慢さ、残酷さ）が目立つという評価が主流である。確かに、ドン・アルバロやドン・ファン・マレクの威厳や人間的魅力と等価なものを、ドン・ファン・デ・アウストリアやドン・ファン・デ・メンドサ、ガルセスらに見出すことは容易ではない。しかし、彼らが皆、単純な悪役として典型的に描かれているかという点、そのようなことはない。

彼らのモリスコに対する姿勢は一様ではない。この戯曲における旧キリスト教徒人物たちのモリスコたちに対する態度は、差別感情を伴った敵対心だけではない。とりわけ、ドン・ファン・デ・メンドサという一人の人物が、モリスコに対する態度の点できわめて多面的な人間として描かれていることは注目に値する。

反乱の契機を作ったメンドサは、先行研究で「傲慢」と評されることが多いが、実は非常に複雑な人物である。彼は先述のように、ムスリム時代の王家の血を引くモリスコの高貴さを冷笑するが、一方で、これまたすでに述べたように、ドン・アルバロ・トゥサニーの姉妹であるモリスコ女性イサベルと恋仲にある。また、モリスコを蔑視する言葉をしばしば発する一方で、ドン・ファン・マレクの名誉のために決闘を挑んできたモリスコのドン・アルバロに対し、対等の立場で決闘に応じている²¹。この旧キリスト教徒人物のモリスコとの関係は二面性を持っており、それは劇の進行につれいっそう顕著となる²²。

第一幕のメンドサはすでに、マレクを侮辱したのち若干の自戒の念に駆られ、言い訳を探しているように見える（一方、ガルセスはメンドサに対し、彼がマレクに暴力をふるったことを単純に支持し、モリスコを蔑視する言辞を発する。この兵士のモリスコ観は最後まで変わらない²³）。

メンドサ 怒りが理性に基づくことは決してない。

ガルセス 弁解なさる必要はありません。彼に手をかけたのは、実に良いことでした。

21 この点は Magnier, *op. cit.*, p. 531 も指摘している。

22 Delgado Morales, *op. cit.*, pp. 172–174 は、メンドサが戯曲冒頭でモリスコを侮辱する一方で、その後ドン・ファン・デ・アウストリアの前でモリスコの擁護者、仲介者（それはメンドサ家のグラナダにおける役割でもある）としてふるまうことを指摘し、グラナダの貴族・旧キリスト教徒のモリスコに対する矛盾した態度を体現していると論じている。Walzer, *op. cit.*, p. 139 は、モリスコに対する愛と憎しみが共存するこの人物に、オリエンタリズム的要素を見出している。

23 ただし、Wilson, *op. cit.*, p. 424 が指摘するように、ガルセスは死の直前にはドニャ・クララ殺害を後悔してはいる。ガレラの戦いに参加した兵士なのかと尋ねるドン・アルバロ・トゥサニー (vv. 2942–2943) に彼は、「そうでなければ良かったものを！」(v. 2944) と答え、「[...] かの地 [ガレラ] に一番乗りしてからというもの、何の力にか、何の宿命にか、何の過酷さにか、何の星にかかわらないが、私は追い回されており、あの不幸な日いらい、私の運命に対し不幸な形で起こらなかったことは何も無いのだ」(vv. 2946–2953) と述べている。

新キリスト教徒²⁴である者は、老人だからといって、ゴンサレス・デ・メンドサ家の者に齒向かうことが不問に付されると考えるべきではないのです。メンドサ おのれの地位を信じるがゆえ傲慢、尊大、向こう見ずになる男は千といる。(vv. 568-575)

先述のように、ドン・ファン・デ・メンドサはドン・ファン・マレクを侮辱したあと、事態收拾のために提案されたドニャ・クララとの縁談も、彼女のモリスコの血筋を理由に拒否するが、それは彼がドン・アルパロの姉妹イサベルと恋仲にあることと矛盾するので、第一幕に多くみられる彼の反モリスコの発言のすべてを額面通りに受け取ることはできない。ドニャ・クララとの結婚を断った真の理由は、イサベルの存在かもしれないのである²⁵。

メンドサはモリスコ反乱勃発後、以下の引用にみられるように、自分の行動が反乱の一因となったことを後悔するし、また、モリスコ反乱軍の力、モリスコの勤勉さと団結力、すぐれた農業技術についてドン・ファン・デ・アウストリアに警告している²⁶。この旧キリスト教徒有力者は、単なるモリスコ差別主義者とは言い切れない。モリスコに対し優越感を抱きつつも、モリスコをよく理解し、その代弁者としてもふるまっているのである。

モリスコを抑圧する王令と並んで、自分の言動も反乱を引き起こす一因となったことについては、メンドサは次のように悔悟の念を述べる。

反乱の原因は、私にも一因があったかもしれませんが、私の口でご説明することを控えるのをお許しくださるよう殿下にお願いしたいところです。私が第一の原因であったと言う方が、彼らを強く圧迫した厳しい王令がそうであったと言うよりも良いのですが。[…] 私が罪をかぶる方が良いのです！ (vv. 979-990)

そして反乱勃発後、ドン・ファン・デ・アウストリアの陣営に参じたドン・ファン・デ・メンドサは、先述のように叛徒たちを蔑視する発言をする一方、モリスコ反乱軍のあなどる

24 ユダヤ教やイスラームからキリスト教に改宗した者とその子孫が、スペインでこのように呼ばれていた。

25 この点は、Cruz, "Making War, Not Love...", p. 28でも指摘されている。

26 こうした点は先行研究でも注目されている。Wilson, *op.cit.*, p. 424はメンドサの自責の念を指摘しているし、Cruz, «Corazón alarbe», pp. 126-127; "Making War...", pp. 24-25は、ドン・ファン・デ・アウストリアに対するメンドサの言葉に、自分が反乱を誘発したことへの自責、モリスコたちの農業技術、軍事的組織力、秘密を守る結束力を認める姿勢を見出している。またWalzer, *op.cit.*, p. 137は、王弟に戦争の残酷さを詳述しない点にメンドサの罪悪感が反映されている可能性を指摘している。Ruiz Lagos, *op.cit.*, pp. 46, 58-59は、ドン・ファン・デ・アウストリアとメンドサの会話から読み取れる、モリスコに対するそれぞれの姿勢が異なり、前者がモリスコ反乱を矮小化するのに対し、後者は反乱を「内戦」と位置付けていると論じている。

ことのできない力について何度も王弟に警告し、拙速な行動を戒める（恋人イサベルが敵陣にいることが彼に影響しているのかもしれない）。

反逆した臣民だからといって、殿下、守りを固めていないわけではないのです。盗賊どもだからと言って、勇敢で大胆でないということにはなりません。皆がそうであり、私はすべての証人です。家の中の敵こそ最も警戒すべきだということにご注意ください。（vv. 921-927）

[...] 敵を軽んじて安易に作戦を危険にさらすべきではありません。最もみじめな敵をさげすむ者でも、うまくはいかないのです。作戦で得られるものが乏しいのであれば、危険を顧みないというのはいっそう悪いことです。殿下が得るものがわずかしかなければ、危険では、おそらく失うものは多いでしょう。これは勝利を信じないからではなく、用心からです。殿下には注意していただきたいからです、彼らの陣地が高所にあること、彼らの山地が込み入っていること、彼らの城壁が手におえぬこと、彼らの岩が閉ざされていること、彼らの民の狡猾さ、彼らの勢力の有利さ、彼らの武器の準備ぶりを。なぜなら石だけで彼らは身を守れますし [...]。（vv. 1135-1153）

陛下はよくお考えください、大したことはない作戦に見えるかもしれませんが、重要性は大きいからです。勝利しても名誉にはならず、負ければ屈辱をもたらす事柄があります。とりわけ今回のようなものがそうです。それゆえ、この手の事柄には最大限の注意が必要なのです。勝ちとるためではなく、失わないために。（vv. 1282-1292）

メンドサはドン・ファン・デ・アウストリアに、モリスコたちが3年間反乱計画を秘密にしたことを説明するが、これは（史実よりも）²⁷モリスコの団結力を強調している。

実に多くの者たちが、この裏切りを3年にわたり沈黙のなかに覆い隠していたのです。驚嘆させ、名声を高めることがらです。この企てをなすために召集された3万を超える者たちのなかに、それだけの日数にわたる秘密を明かしたり言ったりする者が一人たりといなかったとは。（vv. 1009-1022）

モリスコのすぐれた農業技術についても、次のように指摘している。

27 史実では、モリスコを抑圧する王令が出たのが1567年1月で、反乱は翌年12月に勃発している。

[この山は] そこにいる女子供を除いても、3万人のモリスコたちを養うことができます。大勢の家畜たちが草を食む場所もあります。と言っても大部分は、肉よりも、野生の、あるいは干した果物や、栽培する作物で食いつないでいるのですが。それは、地面だけでなく岩までも草が生えるようにしているからです。彼らは農業に実に詳しく巧妙ですので、[…] 石も豊穡にするのです。(vv. 963-978)

そしてガレラが陥落したあと、ドン・ファン・デ・アウストリアが「[…] もう待つには及ばぬ、[…] ベルハへの行軍を始めるのだ。不敗のわが大胆な心は、わが足元に死んだか敗北したアベン・ウメヤを見るまでは、休息するなどあり得ぬ」(vv. 2400-2409) と述べて、アベン・ウメヤのいるベルハへの進撃を熱望するさい、メンドサは次のように述べてモリスコへの寛容を王弟に説く。

彼ら（叛徒たち）が殿下を慈悲深さと無慈悲さをともにそなえたお方とみなし、許しに向けたお顔を見ますよう。罰のお顔は見たのですから。彼らの赦免があなた様の慈悲の証人となりますように、殿下。殿下の厳しさをもう和らげてください。許すことで勇氣はいっそう示されるものです。殺すことは勇氣ではないからです。(vv. 2421-2429)

また彼は、モリスコのなかに真摯なキリスト教徒がいることも認めている（その一人が恋人イサベルである）。「キリスト教徒として生きる者が多くいることを誰が疑いましょうか？ 力づくであちら「反乱軍陣営」に連れていかれた一人の婦人を私は知っております」(vv. 1269-1272)。

先述のように戦場でドン・ファン・マレクを罵ったドン・ロペ・デ・フィゲロアも、ガレラ陥落後は、国王がモリスコ臣民の破滅を望んでいないことをドン・ファンに説き (vv. 2414-2419)、またドン・アルバロの復讐を正義とみなして、その赦免を主張する²⁸。ドン・ロペにとって、殺された妻の仇を討つことは、旧キリスト教徒とモリスコという出自の違いを超えて、貴族の男に課せられた普遍的な義務なのである。「殿下、彼を解放するようお命じってください。この罪は罰よりも称讃に値します。殿下の妻を殺した者を殿下が殺すなら、神に栄光あれ。そうならなければ、殿下はドン・ファン・デ・アウストリアではありませんまい」(vv. 3161-3167)。

28 Wilson, *op. cit.*, p. 424は、メンドサの自責の念と、ガレラ陥落後のフィゲロアのモリスコに対する寛容な姿勢とトゥッサニーへの同情が、スペインの立場を問い直していると論じている。

6. 『死してなお愛す』のモリスコ観

このように、『死してなお愛す』は、旧キリスト教徒とモリスコという二つの集団のあいだの敵意と衝突を描く一方で、敵意だけでは説明のできない、両者のあいだの複雑な感情と相互に及ぼし合う影響も描いている。

それはレコンキスタ完了から反乱勃発までの（幸福なものではなかったかもしれないが）共生の年月が両集団に及ぼした変容を示しているだろう。グラナダのモリスコたちは、ルーツであるアフリカ起源のアル・アンダルスの復興を目指しつつも、キリスト教スペインから1世紀弱のあいだに受けた影響を拭い去ることができない。またグラナダの旧キリスト教徒有力貴族ドン・ファン・デ・メンドサも、モリスコを表面的には見下しているようでいて、モリスコ女性と恋仲にあり、また反乱によってモリスコ共同体が壊滅することは望んでいない。

最終的にモリスコの降伏・帰順という史実を追認した結末で終わるこの戯曲は、1609-1614年に断行されたモリスコ追放という苛烈な政策を直接批判するものではない。だが、モリスコと旧キリスト教徒のあいだの多様な関係を描くことは、スペインにおけるモリスコの運命に複数の可能性がありえたことを受容者に対し示唆しているのではないだろうか。その点で、この戯曲の精神は、追放支持論者（apologistas）たちの、モリスコを一元的にスペインの敵とみなす、単純化された言説²⁹とは異質であると言える。

7. む す び

本稿では、カルデロンの戯曲『死してなお愛す』において、モリスコと旧キリスト教徒の関係がどのように描かれているかを分析した。

カルデロンは、反乱から数十年後に執筆した、一見反乱を単純化した作品において、旧キリスト教徒とモリスコのあいだの多様な関係を描いている。そこからカルデロン本人のモリスコ観を明確な形で抽出するのは容易ではない。しかしながら、この戯曲が、モリスコ問題を複数の視点からみるよう受容者を誘っているのは確かである。

29 この言説については、Miguel Ángel de Bunes Ibarra, *Los moriscos en el pensamiento histórico*, Madrid: Cátedra, 1983, pp. 31-55に詳しい。

参 考 文 献

- Alcalá-Zamora, José, “Individuo e historia en la estructura teatral de «El Tuzaní de la Alpujarra»”, in Luciano García Lorenzo (ed.), *Calderón. Actas del «Congreso Internacional sobre Calderón y el teatro español del Siglo de Oro»* (Madrid, 8–13 de junio de 1981), 3 vols., Madrid: CSIC, 1983, I, pp. 343–363.
- Arroyo Malagón, Silvia, “La representación del espacio como monstruo en algunas obras del Siglo de Oro. El morisco en *Amar después de la muerte*: dialéctica y monstruosidad de espacios”, in Pedro Guerrero Ruiz, José Luis Molina, Santos Campoy & María Teresa Caro (eds.), *Lorca. Taller del tiempo. ALDEEU 2004, Asociación de Licenciados y Doctores Españoles en Estados Unidos*, Murcia: Universidad de Murcia, 2005, pp. 393–400.
- Bayo, Juan Carlos, “Problemas contextuales en torno a *Amar después de la muerte* o *El Tuzaní del Alpujarra*”, in Manfred Tietz & Gero Arnscheidt (eds.), *Calderón y el pensamiento ideológico y cultural de su época. XIV Coloquio Anglogermano sobre Calderón. Heidelberg, 24–28 de julio de 2005*, Stuttgart: Franz Steiner Verlag, 2008, pp. 71–93.
- Belloni, Benedetta, “Moriscos en clandestinidad: la aplicación literaria de la *taqiyya* islámica en la obra *Amar después de la muerte* de Pedro Calderón de la Barca”, *Espéculo. Revista de Estudios Literarios*, 47 (2011) (<http://www.ucm.es/info/especulo/numero47/moriscal.html> 2018年10月13日閲覧)。
- Bunes Ibarra, Miguel Ángel de, *Los moriscos en el pensamiento histórico*, Madrid: Cátedra, 1983.
- Calderón de la Barca, Pedro, *Amar después de la muerte*, ed. Erik Coenen, Madrid: Cátedra, 2008.
- Carrasco, Raphaël, “Contra la guerra: Calderón y los moriscos de las Alpujarras”, in Felipe B. Pedraza Jiménez, Rafael González Cañal & Elena E. Marcello (eds.), *Guerra y paz en la comedia española. Actas de las XXIX Jornadas de teatro clásico de Almagro. Almagro, 4, 5 y 6 de julio de 2006*, Cuenca: Universidad de Castilla-La Mancha, 2007, pp. 127–155.
- Case, Thomas E., “Consideraciones sobre *Amar después de la muerte*, de Calderón de la Barca”, *Segismundo: Revista Hispánica de Teatro*, 37–38 (1983), pp. 37–48.
- , “Honor, Justice, and Historical Circumstance in *Amar después de la muerte*”, *Bulletin of the Comediantes*, 36 (1984), pp. 55–69.
- Caso González, José Miguel, “Calderón y los moriscos de las Alpujarras”, in Luciano García Lorenzo (ed.), *Calderón. Actas del «Congreso Internacional sobre Calderón y el teatro español del Siglo de Oro»* (Madrid, 8–13 de junio de 1981), 3 vols., Madrid: CSIC, 1983, I, pp. 393–402.
- Checa, Jorge, “Calderón de la Barca y las catástrofes de la historia: *Amar después de la muerte*”, *Nueva Revista de Filología Hispánica*, 51 (2003), pp. 147–192.
- Coenen, Erik, “Las fuentes de *Amar después de la muerte*”, *Revista de Literatura*, 69 (2007), pp. 467–485.
- , “Introducción”, in Pedro Calderón de la Barca, *Amar después de la muerte*, ed. Erik Coenen, Madrid: Cátedra, 2008, pp. 9–75.
- Cruz, Anne J., “Making War, Not Love: The Contest of Cultural Difference and the Honor Code in Calderón’s *Amar después de la muerte*”, *Caliope*, 6 (2002), pp. 17–33.
- , “«Corazón alarbe»: Los moriscos, el código de honor y la crítica de la guerra en *Amar después de la muerte*”, in Ignacio Arellano (ed.), *Calderón 2000. Homenaje a Kurt Reichenberger en su 80 cumpleaños (Actas del Congreso Internacional, IV Centenario del nacimiento de Calderón, Universidad de Navarra, septiembre, 2000)*, 2 vols., Kassel: Reichenberger, 2002 (Teatro del Siglo de Oro. Estudios de literatura, 75–76), II, pp. 121–132.
- Delgado Morales, Manuel, “‘Amar después de la muerte’ y la ‘imprudencia’ del castigo de los moriscos de Granada”, in Serafín González & Lillian von der Walde (eds.), *Palabra crítica. Estudios en homenaje a José Amezúa*, México D.F.: Universidad Autónoma Metropolitana / FCE, 1997, pp. 169–180.
- Devos, Brent W., “Calderón’s Ambiguity with Respect to the Moriscos in *El Tuzaní de la Alpujarra*”, *Anuario Calderoniano*, 2 (2009), pp. 111–127.
- Domínguez Ortiz, Antonio & Bernard Vincent, *Historia de los moriscos. Vida y tragedia de una minoría*, Madrid:

- Revista de Occidente, 1978. 2ª ed., 1979.
- Garrot Zambrana, Juan Carlos, “Efectos cómicos y patéticos en Calderón: *El Tuzaní de la Alpujarra*”, in Milagros Torres & Ariane Ferry (eds.), *Tragique et comique liés dans le théâtre, de l'Antiquité à nos jours (du texte à la mise en scène)*, Rouen: Publications électroniques du Cérédi, 2013 (<http://ceredi.labos.univ-rouen.fr/public/?efectos-comicos-y-pateticos-en.html> 2018年10月13日閲覧).
- Grilli, Giuseppe, “La otredad de *Amar después de la muerte*”, in Ignacio Arellano (ed.), *Calderón 2000. Homenaje a Kurt Reichenberger en su 80 cumpleaños. Actas del Congreso Internacional, IV Centenario del nacimiento de Calderón, Universidad de Navarra, septiembre, 2000*, 2 vols., Kassel: Reichenberger, 2002 (Teatro del Siglo de Oro. Estudios de literatura, 75–76), II, pp. 207–218.
- Hurtado de Mendoza, Diego, *Guerra de Granada*, ed. Bernardo Blanco-González, Madrid: Castalia, 1970.
- Magnier, Grace, “Representación del morisco héroe en dos comedias del Siglo de Oro: *El Tuzaní de la Alpujarra* y *El valiente Campuzano*”, in Jean Pierre Molénat et al., *Actas. Simposio Internacional de Mudejarismo. Mudéjares y moriscos. Cambios sociales y culturales. Teruel, 12–14 de septiembre de 2002*, Teruel: Centro de Estudios Mudéjares / Instituto de Estudios Turolenses, 2004, pp. 527–535.
- Mármol Carvajal, Luis del, *Historia del rebelión y castigo de los moriscos del reino de Granada*, ed. Javier Castillo Fernández, Granada: Universidad de Granada, 2015.
- Pérez de Hita, Ginés, *La guerra de los moriscos (Segunda parte de las Guerras Civiles de Granada)*, ed. Paula Blanchard-Demouge, Madrid: Imprenta de E. Bailly-Bailliére, 1915. Ed. facisimil, Granada: Universidad de Granada, 1998.
- Romanos, Melchora, “Ficción y realidad histórica en «El Tuzaní de la Alpujarra o Amar después de la muerte» de Pedro Calderón de la Barca”, in Kurt & Theo Reichenberger (eds.), *Calderón: protagonista eminente del barroco europeo*, 2 vols., Kassel: Reichenberger, 2000 (Teatro del Siglo de Oro. Estudios de literatura, 60–61), I, pp. 355–372.
- Ruiz Lagos, Manuel, “«El Tuzaní de la Alpujarra» o la singularidad de la memoria histórica”, in Pedro Calderón de la Barca, *El Tuzaní de la Alpujarra*, ed. Manuel Luis Lagos, Alcalá de Guadaíra (Sevilla): Guadalmena, 1998, pp. 17–80.
- Sieber, Diane E., “El monstruo en su laberinto: cristianos en las Alpujarras de *Amar después de la muerte*”, in Florencio Sevilla Arroyo & Carlos Alvar Ezquerria (eds.), *Actas del XIII Congreso de la Asociación Internacional de Hispanistas, Madrid 6–11 de julio de 1998*, 4 vols., Madrid: Castalia, 1998, I, pp. 740–746.
- Valbuena Briones, Ángel, “La guerra civil de Granada a través del arte de Calderón”, in A. David Kossoff & José Amor y Vázquez, *Homenaje a William L. Fichter. Estudios sobre el teatro antiguo hispánico y otros ensayos*, Madrid: Castalia, 1971, pp. 735–744.
- Walzer, Hannaá, “Los moriscos de *Amar después de la muerte*”, in José María Ruano de la Haza & Jesús Pérez Magallón (eds.), *Ayer y hoy de Calderón. Actas seleccionadas del Congreso Internacional celebrado en Ottawa del 4 al 8 de octubre del 2000*, Madrid: Castalia, 2002, pp. 133–145.
- Wilson, Margaret, “‘Si África llora, España no ríe’: A Study of Calderón’s *Amar después de la muerte* in Relation to its Source”, *Bulletin of Hispanic Studies*, 61 (1984), pp. 419–425.
- 日本イスラム協会ほか (監) 『新イスラム事典』平凡社, 2002年。

Summary

Antagonism and Coexistence:
The Morisco Problem in Calderon's *Amar después de la muerte*

Yasuhiro Mikura

This article studies how Pedro Calderón de la Barca depicts the complicated relationship between the Moriscos and Old Christians in his play *Amar después de la muerte* [*Love After Death*]. Written in the first half of the 17th Century, the play is set against the backdrop of the Moriscos' rebellion in the Alpujarra region, which occurred between 1568 and 1571.

In this play, on the one hand, there is antagonism between the Moriscos and Old Christians. Each group distinguishes themselves from the other. The Moriscos are proud of their North African origin and glorious past, specifically, the conquest of Spain and the prosperity of Al-Andalus. They call Old Christians "Spaniards." On the other hand, Old Christians express their enmity toward the Moriscos and discriminate against them.

However, at the same time, the relationship between the Moriscos and Old Christians cannot be wholly explained by antagonism. What the Moriscos say and do in this play reveal that they have been influenced by Old Christians and their culture in many ways. Some Old Christians think highly of the Moriscos and advocate leniency toward them after their defeat.

This complicated relationship between both communities is a result of the coexistence that followed the fall of Granada (1492). Calderón's depiction of this relationship invites readers to see the Morisco problem from multiple viewpoints.